

論文

現代の高校生における「ぷちナショナリズム」意識

——国際試合の応援等にみられる高校生の「日本」をめぐる態度や意識に関する研究——

小 針 誠

同志社女子大学
現代社会学部・現代こども学科
准教授

Abstract

The purpose of this study is to analyze the “*petit nationalism*” (*innocent patriotism*) of senior high school students (N=1591) based on a questionnaire with results, correlated to such factors as their attributes (gender, grade), social relationships, academic achievement, etc. The study's analysis demonstrates the following facts.

First, the factor analysis, principal analytical method with a varimax scale rotation, yielded three factors a “commitment to communities”, “agreement about the national flag [HINOMARU]: and the national anthem [KIMIGAYO] and “Chauvinism”. Second, many of the students who expressed “petit nationalism” were boys of low academic achievement. Third, they reported good relationships with their friends, parents and local communities. These social ties are what led to their “petit nationalism”.

1. 研究目的

本研究の目的は、2003年に実施された高校生対象の質問紙調査を通じて、いわゆる「ぷちナショナリズム症候群」（以下、特に断りのない限り「ぷちナショナリズム」と略記）の意識の構造とその社会的背景について計量的に明らかにすることにある。果たして「ぷちナショナリズム」とはいかなる意味で愛国心やナショナリズムでありうるのか（ないのか）、本研究の核心はその問題の解明にあるといつてよい。

「ぷちナショナリズム」とは評論家で精神科医の香山リカ（2002）による現代日本の若者たちを表象する造語である。その香山によれば、オリンピックやサッカーのワールドカップなどの国際試合の場面で、無邪気に「ニッポン」を

応援する若者たち、日本語ブームに群がる人たち、屈託なく「ニッポン万歳」などを叫ぶ若者たちの「日本」という国家への向き合い方を指してそう表現した。

「ぷちナショナリズム」は、従来のナショナリズムや愛国心のように、右翼（保守）や左翼（革新）の対立のなかで主体的な選択をした結果というよりもむしろ、あくまでサブカルチャーの領域で、若者自身が何かに騙された結果もしくは真面目さの結果とみなされている。

いずれにしても、「真正のナショナリズム」とは性質の異なる何物であるからこそ、頭に「ぷち」という言葉が付属しているのである（香山2002）。おそらくそれは一時の国家意識と高揚した集団意識とが結合した意識ないしは心理ではないだろうか。

そして、香山は、ソルトレイク五輪での韓国、9.11以降のアメリカ、極右政党・国民戦線（Front

An Analysis on “*petit nationalism*” (*Innocent Patriotism*) in modern high school students

National)の台頭がみられたフランスなどに対しつつ、世界的に見て、日本のぶちナショナリズム現象がいかに特異な保守化の一現象であるかを紹介している。

香山自身の説明に従えば、「ぶちナショナリズム」の背景には、「エディプス・コンプレックスの不在」という精神病理学的な問題があるという。昨今の政治家、力士、タレント・俳優などに頻繁に見かける「屈託のない二世」などは、本来対決すべき父と息子との間のエディプスの経験がなくなってしまい、もともと親が築き上げた地盤や名声・評判を利用して社会的に成功することに何の抵抗もなくなっている。そして市井の若者たちもそうした現状に反発することなく、ありのままを受け入れるべきだとする保守的な背景が日本社会全体に広がっているという。

そうした説明の方法自体は香山がそもそも精神科医であることに由来するとおもわれる。日本の若者たちの間に見られるという「ぶちナショナリズム」を若者の保守化や精神医学的病理などと言って、ぶちナショナリズム現象を説明することは実に容易い。しかし、それが先に見た韓国、アメリカ、フランスの愛国現象とどのように異なるのか、またそうした現象の社会的背景についても同時に明らかにしなければならぬのではないだろうか。そして、精神分析的な見方は、いわゆる心理学・心理主義的な問題の見方¹⁾と同様に、原因を当事者個人の意識や「こころ」または「精神」の問題に還元してしまい、ぶちナショナリストたちの行動を「右翼／左翼といった主体的な選択ではない」とみなす問題意識をもちつつも、結局は「彼らの(精神的な)病理性ゆえにそうなる」という個人的な問題でしか説明できない。つまり、個人の主体的な選択ではないといえ、個人の主体性を排除されるけれども、しかし問題の起源や要因をその個人(の病理)に還元する姿勢はそのまま残ってしまうのである(高原2006)。これでは結局のところ、その要因や背景についての十分な説明にはなりえていないのである。

また、これまで児童・生徒と愛国心をめぐる問題については、学校教育現場を中心に議論が展開されることが多かったように思われる。ただし、教育基本法や学習指導要領に「愛国心」に関する条項や用語を入れるか否か、1999年の「国旗・国歌法」の制定と日の丸掲揚・君が代斉唱を学校式典(入学式・卒業式)で実施するか否か、あるいは『新しい歴史教科書』(扶桑社)などの採択をめぐる問題など、いわば公教育の現場で、「国を愛する」教育をめぐる、賛成か反対かがさかんに論争されてきた。ところが、そうした教育の予測される影響や効果については、ほとんど検証されてこなかった。もっといえば、賛成・反対いずれの立場にしても、それぞれの立脚するイデオロギー的な立場によって賛否を表明してきたに過ぎなかったともいえる。

広田(2005)によれば、学校現場で「国を愛する」教育を行ったからといって、保守的な政治家や文部科学省が意図する通りに、すべての子どもが愛国心、とりわけ穏健なナショナリズムを内面化するとは限らないという。その一方で、国を愛する気持ちから抵抗・反抗する子ども、愛国心の価値を過剰に内面化する子ども(ある種の右翼少年)、あるいは儀礼的同調を見せる子どもなども現れるかもしれない。

いずれにしても、子どもたちのナショナリズムをめぐる諸問題は学校教育を中心に論じられてきたが、子どもたちは学校教育のほかにも、日常的にテレビやインターネットなどの多様な情報メディアに接し、学校教育以上の影響を受けて、自らの下位文化(サブカルチャー)を形成することも少なくない。そのなかにはナショナリズムに関わるものも含まれるだろう。とりわけ本研究で明らかにする「ぶちナショナリズム」は必ずしも学校教育で伝達・実践される類の愛国心ではない。むしろ学校教育とは離れたサブカルチャーの領域で伝達・実践される愛国心の一形態こそ、ぶちナショナリズムなのではないだろうか。

ところが「ぶちナショナリズム」はマスコミ

や評論・論壇をはじめとして、社会的に注目を集めた割には、これまで十分な説明や実証がなされていない。むしろそれ自体が通俗的な概念としてみなされてきたためか、十分な理論化と実証がされてこなかったというほうが適切だろう。本研究は、これまでの研究動向と問題点を踏まえて、質問紙調査の分析を通じて、「ぶちナショナリズム」の構造と背景・要因、そして「ぶちナショナリズム」と日本に対する帰属意識・愛国心との関連を実証的に明らかにしたい。

以下、本論文の構成を明らかにしよう。第2章は本論文で実証を行う上で使用されるデータと各変数について述べる。第3章では、「ぶちナショナリズム」に関する12の質問項目の回答を点数化、因子分析にかけて、その意識の構造について明らかにする。第4章では、「ぶちナショナリズム」意識の規定要因として、諸属性（性別・学年・成績）や中間集団（友達のグループ、学校の部活動、通っている学校、住んでいる地域など）への帰属意識との関連を明らかにする。第5章では、これまでの分析結果を踏まえて、以上の変数と日本という国に対する帰属意識（「あなたは日本が好きですか？」）の回答との関連を明らかにする。

2. データと作業仮説

(1) データ

本論文が主に依拠する質問紙調査はベネッセコーポレーションが2003年2月～3月に実施した学校通しによる調査データである。

調査対象校は関東地方（東京都）の公立A高校、関東地方（群馬県）の公立B高校、中部地方（静岡県）の公立C高校の3校で、それぞれのサンプルサイズはA高校256名（普通科のみ）、B高校576名（普通科435名・国際科141名）、C高校759名（普通科682名・英語科77名）の計1591名であった。サンプル全体のうち13.7%が国際科もしくは英語科であり、一般の高校生より外国への関心が高い生徒が多く含まれると考えられる²⁾。基本的な属性を見ると、性別は男子51.8%、女子48.2%、学

年別では01年43.5%、2年56.5%で構成されている。

なお、本調査が実施された2002年度は、5月～6月にFIFAワールドカップ（サッカー）が日韓共同で開催され、スポーツを通じた日韓両国の融和が進む一方³⁾、4月には小泉首相（当時）が靖国神社に参拝し、中国や韓国をはじめとするアジア各国からの批判を浴びることになった。また、9月には小泉首相自らが北朝鮮に赴き、同国の金正日総書記が日本人拉致の事実を正式に認めるなど、特に近隣諸国との関係で「日本」という国家のあり方が問われた年であった。日本国内においても、住民基本台帳制度がスタートした。これは国家の個人情報管理の点から様々な立場からの論議を呼び、一部の地域では住民基本台帳のシステムそのものから離脱したことが却って注目を集めた。経済生活の点からみると、出口の見えない平成不況のなかで国民生活が一向に改善することはなかった。

また、調査時期の2月下旬から3月上旬にかけて、北朝鮮の核問題（いわゆるテポドン発射）や同年の3月17日に開戦したイラク戦争などの国家間の出来事がテレビやインターネットなどマスメディアを通じて、高校生の国家意識に影響を及ぼしている可能性は否定できない。

なお、本研究のデータの入手・利用に当たっては、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターのSSJデータ・アーカイブの許可を得た。同調査の報告書として、ベネッセ未来教育センター編『モノグラフ・高校生 高校生からみた「日本」——ナショナルなものへの感覚——』（監修・深谷昌志）が2003年に刊行されている。

(2) 作業仮説

本研究の目的は「ぶちナショナリズム」と呼ばれる社会的現象の構造と日本という国への帰属意識との関連性を明らかにしようとするものである。ぶちナショナリズムは日本という国家への帰属意識と連続または大きく重なる意識であると想定し、以下を仮説として挙げることが

できる。

第一に、ぶちナショナリズムに関する意識は、学力の高い者⁴⁾、家族や学校の友人などとの関係が良好なもののほど、高まる傾向にあると考えられる。それというのも、中部地区の中学2年生を対象とした先行研究のひとつである小針(2009)によれば、「日本という国を愛する気持ち」の高い生徒の特徴は、通学する学校種別でみると私立中学校に比べ公立中学校で、居住地域では大都市圏に比べ市部・町村部で、学力では低い層に比べて高い層で、友人関係では友人の数が多いほうで、親子関係を表す親と話す時間についても長時間の層のほうで、より強く見られる傾向が確認された。家族や友人関係など人間関係が比較的良好なものに国を愛する意識の高いことも確認された。また、社会への関心が高いもの、社会変革の意識の高いもののほうが日本という国を愛する傾向がみられた。

第二に、「ぶちナショナリズム」はいわゆる国を愛する気持ちと連続すると考えることもできる。香山(2006)は、ぶちナショナリズムについて、「愛国心」をめぐる公教育のあり方やそれを含めた政治の問題、あるいは真正のナショナリズムや愛国心などの問題とは区別されて、漠然とした社会の雰囲気をもたらす同調性というべきかもしれないと指摘している。つまり、真正のナショナリズムとぶちナショナリズムとは一線を画す意識であるというのである。しかし、筆者はいずれも「国を愛する気持ち」を含む意識という点において共通または連続する部分もあると捉えるほうがむしろ自然ではないかと考える。

3. 変数

ぶちナショナリズム意識を明らかにする上で、本論文が分析の対象としたのは「オリンピックなどの国際的な試合で、あなたは次のようなことをしたい(してほしい)と思いますか」に関して尋ねた12の質問項目である。それぞれの質問項目は「とてもしたい(してほしい)」から「ぜんぜんしたくない(してほしくない)」

までの4件法で回答された。

それぞれ12の質問項目を構造化するうえで、「とてもしたい(してほしい)」という回答に4点～「ぜんぜんしたくない(してほしくない)」を1点と点数化し、因子分析(主因子法・ヴァリマックス回転解)を施したところ、以下3つの因子が抽出された。因子分析と単純集計の結果については〔表-1〕、および以降の分析に関わるすべての変数の基本統計量については〔表-2〕に示したとおりである。

第1因子は、全体の6～7割が回答し、「応援歌を歌う」「ウェーブをする」「みんなで『ニッポン!』と叫ぶ」など、直接的には国家意識と関連するものではないものの、他者と行動をとともにする意識、すなわち共同体への同調意識を含むことから「共同体意識」因子と解釈できる。

第2因子は、全体の3～5割が回答したもので、「試合を前に起立して、みんなで『君が代』を歌う」や「日の丸の旗をもって応援する」など、いずれも日本という国家の象徴である「日の丸」や「君が代」に関連する項目であることから、「日の丸・君が代」因子と名付けた。ただし、実際の学校式典などにおける日の丸・君が代に対する意識や態度との異同については明らかではない。

第3因子は「ミスジャッジでも日本に有利な判定なら拍手する」(29.2%)や「日本に不利な判定にブーイングする」(45.1%)などが含まれる「排外性」因子として分類することができる。

「ぶちナショナリズム」に関する3変数の全般的な傾向をいえば、生徒たちの国家意識は日の丸・君が代意識のようなナショナリズムと関連する意識が明らかに高いわけでもなく、そうかといって排外性意識も極端に高いわけでもない、むしろ穏健なナショナリズムが育まれているといえるだろう。しかし、社会的背景との関連などが十分に明らかにされない限り、そう断定するには性急の感がないわけではない。

他方、独立変数は以下のとおりである。まず、先の仮説を実証するために、基本的な属性とし

て、性別、学年、成績を想定した。学年については、先述のとおり、1年生と2年生を対象としている。「成績」については、クラス内での成績の位置づけを5段階で訊いているにすぎないため、調査対象校の学校ランクと合わせて、本人の学力を高校ランク全体のなかで位置づけることはできない。つまり、この「成績」変数は、学力を直接反映した内容ではないかもしれないが、日常の学校生活やクラスの中での学業成績は高校生各人の意識（自尊感情など）にも影響を及ぼすこともあるだろう。

また、先の第2の仮説、様々な社会集団に対する帰属意識との関連を検証するために、ここ

では、家族、友達のグループ、学校の部活動、通っている学校、住んでいる地域の5つの変数について検討したい。いずれも「好き」～「嫌い」という5件法（友達のグループや部活動などについては「帰属がない」場合は6件法）で回答された。

4. 「ぶちナショナリズム」を規定する要因

(1) 共同体意識の規定要因

共同体意識についての分析結果は〔表-3〕のとおりである。Model 1は性別、学年、クラスの中での成績などの基本的な属性を、Model 2ではこれらに加えて家族、友達のグループ、学

〔表-1〕オリンピックなどの国際的な試合でしたい（してほしい）ことに関する意識構造

質問項目	単純集計(%) ^{〔註〕}	I：共同体	II：日の丸・君が代	III：排外性
応援歌を歌う	69.3	0.817	0.227	0.175
ウェーブする	62.9	0.783	0.174	0.175
みんなで日本の選手の名前を叫ぶ	73.3	0.744	0.267	0.297
みんなで「ニッポン！」と叫ぶ	70.5	0.659	0.422	0.284
外国のチームがよいプレーをしたときには拍手する	77.5	0.577	0.006	-0.200
試合の前に起立して、みんなで「君が代」を歌う	31.0	0.105	0.771	0.004
日の丸の旗をもって応援する	51.3	0.383	0.718	0.045
試合の前にタレントなどが「君が代」を歌う	30.2	-0.052	0.658	0.193
日の丸をアレンジしたTシャツやタオルを身につける	36.4	0.371	0.625	0.077
日の丸を顔や腕に描く	38.5	0.436	0.586	0.130
ミスジャッジでも日本に有利な判定には拍手する	29.2	0.054	0.158	0.835
日本に不利な判定にブーイングする	45.1	0.186	0.059	0.812
累積因子負荷量（％）		26.040	48.010	68.080

*主因子法によるヴァリマックス回転解による因子負荷量

〔註〕単純集計は「とてもしたい」と「かなりしたい」と回答した者の割合を合計した値。

〔表-2〕変数の基本統計量

	最大値	最小値	平均値	標準偏差	備考
共同体意識	20.000	5.000	14.748	3.480	
日の丸・君が代意識	20.000	5.000	11.243	3.307	
排外性意識	8.000	2.000	4.635	1.604	
性別（ダミー）	1.000	0.000	0.518	0.500	男子=1, 女子=0
学年（ダミー）	2.000	1.000	1.565	0.496	2年生=2, 1年生=1
クラスの中での成績	5.000	1.000	2.591	1.187	上位5～下位1
家族（帰属意識）	5.000	1.000	4.125	0.982	好き5～嫌い1
友達のグループ（帰属意識）	5.000	0.000	4.438	0.894	好き5～嫌い1、入っていない0
学校の部活動（帰属意識）	5.000	0.000	3.289	1.811	好き5～嫌い1、入っていない0
通っている学校（帰属意識）	5.000	1.000	3.521	1.120	好き5～嫌い1
住んでいる地域（帰属意識）	5.000	1.000	3.663	1.074	好き5～嫌い1
日本（帰属意識）	5.000	1.000	3.889	1.048	好き5～嫌い1

校の部活動、通っている学校、住んでいる地域のそれぞれの帰属意識を変数に加えた。なお、以下の分析もこれと同様である。

Model 1では、性別において男子よりも女子のほうで、共同体意識が高い ($\beta = -0.225$)。学年やクラスの中の成績は有意ではなかった。Model 2では、性別については先と同様に、女子生徒において ($\beta = -0.175$)、また、クラスの中での成績が低い生徒 ($\beta = -0.056$) に共同体意識が高い傾向が確認できた。それ以外の家族や学校・地域社会に対する帰属意識を見ていくと、家族 ($\beta = 0.116$)、友達のグループ ($\beta = 0.064$)、学校 ($\beta = 0.078$)、地域社会 ($\beta = 0.092$) など、いずれも帰属意識の高いものほど、共同体意識が高まる傾向が確認できる。生徒をとり

まく中間集団に対する高い帰属意識や信頼はそのまま共同体意識に接続しているといえるだろう。

(2) 日の丸・君が代意識

続いて、日の丸・君が代意識の分析結果について検討してみよう〔表-4〕。これも先の共同体意識の分析結果と比較的類似の傾向を示している。

まず、Model 1ではやはり性別のみ負に有意、すなわち女子生徒ほど「日の丸・君が代」意識が高まることが確認できる ($\beta = -0.173$)。また、Model 2では、性別 ($\beta = -0.123$) とクラスの中の成績 ($\beta = -0.060$) がともに負に有意であることから、女子で、そしてクラスの中での成

〔表-3〕 共同体意識の規定要因（重回帰分析）

	Model 1			Model 2		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
性別	-1.568 ***	0.174	-0.225	-1.219 ***	0.174	-0.175
学年	-0.196	0.175	-0.028	-0.116	0.171	-0.017
クラスの中での成績	-0.098	0.072	-0.033	-0.164 *	0.071	-0.056
家族（帰属意識）				0.412 ***	0.097	0.116
友達のグループ（帰属意識）				0.250 *	0.104	0.064
学校の部活動（帰属意識）				-0.039	0.049	-0.020
通っている学校（帰属意識）				0.241 **	0.087	0.078
住んでいる地域（帰属意識）				0.297 **	0.087	0.092
(定数)	16.122 ***	0.346		11.369 ***	0.624	
R ² =.055				R ² =.110		
F=30.069 ***				F=23.649 ***		

註) *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ (以下同様)

〔表-4〕 「日の丸・君が代」意識の規定要因（重回帰分析）

	Model 1			Model 2		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
性別	-1.142 ***	0.167	-0.173	-0.816 ***	0.166	-0.123
学年	-0.225	0.168	-0.034	-0.164	0.163	-0.024
クラスの中での成績	-0.089	0.07	-0.032	-0.168 *	0.068	-0.060
家族（帰属意識）				0.451 ***	0.093	0.133
友達のグループ（帰属意識）				0.005	0.099	0.001
学校の部活動（帰属意識）				0.042	0.047	0.023
通っている学校（帰属意識）				0.250 **	0.083	0.085
住んでいる地域（帰属意識）				0.379 ***	0.083	0.123
(定数)	12.405 ***	0.332		8.056 ***	0.595	
R ² =.034				R ² =.110		
F=18.266 ***				F=23.649 ***		

績が低いものほど、日の丸・君が代意識は高まる傾向にある。それに対して、友達のグループと学校の部活動以外の、家族 ($\beta = 0.133$)、通っている学校 ($\beta = 0.085$)、住んでいる地域社会 ($\beta = 0.123$) など中間集団に対する帰属意識が高いものほど、日の丸・君が代に対する意識は高まる傾向にある。

(3) 排外性意識

第3因子の排外性意識〔表-5〕については、Model 1ではそもそも分析モデルとして適切ではなかった ($F=0.587$ $p>.05$)。また、このモデルでは、統計的に有意な変数についても確認されなかった。

Model 2では幾分改善されてはいるが、それでも決定係数 ($R^2=0.019$) が2%以下であるなど、十分に改善されているとは言い難い。性別、学年、成績などの独立変数は有意ではなかったものの、やはり友達のグループへの帰属意識 ($\beta = 0.128$) が高まれば、排外性意識も高まる傾向にある。

それに対して、逆に学校の部活動に対する帰属意識の高いものほど、排外性意識は有意に低下する傾向にある ($\beta = -0.065$)。おそらく運動部に所属する生徒をはじめとして、日本に有利なミスジャッジに拍手をしたり、日本に不利な判定にブーイングする行為などを、「日本」と関連づけられた意識というよりもむしろ、それ

自体をスポーツマンシップに倣う行為として考える傾向や意識があるように思われる。

以上、〔表-3〕から〔表-5〕までの「ぶちナショナリズム」に関する3変数の分析結果を見ていくと、ぶちナショナリズムとは多様な意識から構成されるとともに、それを属性別に見ていくと、性別では女子のほうが有意に高く、クラスの中での成績があまり高くない生徒に高くなる傾向が見られる。

しかしながら、その一方で、中間集団（家族・学校・地域社会など）に対する帰属意識が高い者、つまりおそらくは家族・学校・地域社会との関係が良好な者ほど、ぶちナショナリズムの意識は高まる傾向が看取される。そのなかでも特に居住している地域社会への帰属意識の規定力が強い。身近な地域社会という地理的な愛着がともすれば「ぶちナショナリズム」という国家的な意識に連続しているのである。

5. 日本という国に対する帰属意識との関連～ぶちナショナリストは愛国者なのか？～

以上では、諸属性や家族・学校・地域社会など中間集団への帰属意識との関連で、いわゆる「ぶちナショナリズム」の背景を明らかにしてきた。

「日本という国が好きか」で回答された日本という国に対する帰属意識との関連を分析することで、これまでの変数に加えて、ぶちナシ

〔表-5〕「排外性」意識の規定要因（重回帰分析）

	Model 1			Model 2		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β
性別	-0.005	0.082	-0.002	0.046	0.084	0.014
学年	0.036	0.083	0.011	0.056	0.082	0.017
クラスの中での成績	-0.042	0.034	-0.032	-0.040	0.034	-0.03
家族（帰属意識）				0.018	0.047	0.011
友達のグループ（帰属意識）				0.230 ***	0.050	0.128
学校の部活動（帰属意識）				-0.058 *	0.024	-0.065
通っている学校（帰属意識）				-0.048	0.042	-0.034
住んでいる地域（帰属意識）				0.037	0.042	0.025
(定数)	4.675	0.163		3.746 ***	0.300	
$R^2=.001$				$R^2=.019$		
$F=0.587$				$F=3.823$ ***		

〔表-6〕「日本という国に対する帰属意識」（日本という国が好き）の規定要因（重回帰分析）

	Model 1			Model 2			Model 3		
	B	S.E.	β	B	S.E.	β	B	S.E.	β
性別	-0.119 *	0.053	-0.057	0.039	0.051	0.019	0.088	0.050	0.042
学年	-0.053	0.054	-0.025	-0.017	0.050	-0.008	-0.003	0.049	-0.001
クラスの中での成績	0.011	0.022	0.012	-0.017	0.021	-0.019	-0.005	0.020	-0.006
家族（帰属意識）				0.164 ***	0.028	0.153	0.141 ***	0.028	0.132
友達のグループ（帰属意識）				0.139 ***	0.030	0.119	0.123 ***	0.030	0.106
学校の部活動（帰属意識）				-0.017	0.014	-0.029	-0.016	0.014	-0.028
通っている学校（帰属意識）				0.080 **	0.025	0.085	0.066 **	0.025	0.071
住んでいる地域（帰属意識）				0.218 ***	0.025	0.222	0.186 ***	0.025	0.191
共同体意識							0.008	0.009	0.026
「日の丸・君が代」意識							0.055 ***	0.009	0.173
排外性意識							0.066 ***	0.016	0.100
(定数)	4.005 ***	0.106		1.622 ***	0.182		0.834 ***	0.198	
	R ² =.004			R ² =.161			R ² =.213		
	F=2.258			F=37.020 ***			F=37.484 ***		

ナリズムと日本に対する愛国心との関連を明らかにしてみよう。分析結果は〔表-6〕の通りである。

Model 1 では、性別のみ負に有意であった（ $\beta = -0.057$ ）。これはそれまでのおちナショナリズムの諸変数と同様、女子ほど日本という国に対する帰属意識が高いことを示している。

ところが、Model 2 では、性別が有意ではなくなり、家族（ $\beta = 0.153$ ）、友達のグループ（ $\beta = 0.119$ ）、通っている学校（ $\beta = 0.085$ ）、住んでいる地域社会（ $\beta = 0.222$ ）といった中間集団に対する帰属意識が高いほど、国家への帰属意識につながっている。やはり先の第2の仮説で示したとおり、友人、家族、学校での人間関係が良好なものほど、国に対する帰属意識が高まることが明らかにされた。また、居住する地域社会に対する愛着や帰属意識は地域にとどまらず、国に対する帰属意識にそのまま直結していることも明らかになった。

Model 3 は、Model 2 で投入した諸変数に加えて、先に析出された「おちナショナリズム」に関する3つの意識を変数として投入した結果である。ここでも、先の Model 2 と同様、家族（ $\beta = 0.132$ ）、友達のグループ（ $\beta = 0.106$ ）、通っている学校（ $\beta = 0.071$ ）、住んでいる地域社会（ $\beta = 0.191$ ）など中間集団に対する帰属意識が高いものほど、国家意識も高まる傾向が窺える。

これまでと同様に、とりわけ地域社会に対する帰属意識の影響力は強い。

さらに、おちナショナリズムに関する3変数を投入した分析結果について見ていくと、共同体意識をのぞいて、すなわち日の丸・君が代意識（ $\beta = 0.173$ ）と排外性意識（ $\beta = 0.100$ ）の2変数において正に有意であった。試合の前に起立して君が代を歌ったり、日の丸の旗を振って日本の選手を応援するのは、集団意識としての「ノリ」でそうしているわけではなく、国家的象徴に対する愛着や帰属意識が日本という国家への帰属意識にほぼ関連・連続しているのである。

それに加えて、クラス内での成績という変数についても注目すべきであろう。おちナショナリズムでは共同体意識と日の丸・君が代意識の分析結果（〔表-3〕と〔表-4〕の Model 2）をみると、負に有意である。つまり、クラス内の成績が低い生徒ほど、おちナショナリズム意識が高い。ところが、日本という国に対する帰属意識からナショナリズムの分析結果〔表-6〕を見ていくと、いずれも統計的に有意ではなくなっている。つまり、クラス内での学業成績が低い生徒ほど、国際試合のような形で発揚される「おちナショナリズム」意識は高まるものの、しかしながら「日本という国を愛するかどうか」という形で改めて愛国心を問われると、明確に

それを意識することはなくなってしまうのではないだろうか。つまり、ぶちナショナリズムは「国を愛する」という意味での愛国心と関連するけれども、しかし一部の者にとっては「国を愛する」という形や言葉で意識化されるような愛国心ではなく、周りの観衆とともに日本のチームを応援している／応援したいという同調意識や集団意識なのである。

6. 結論

本研究は「ぶちナショナリズム」という一見通俗的な概念を、高校生の質問紙調査から分析し、その傾向を明らかにした。ぶちナショナリズムは高校生における国家意識を考察する上で非常に重要な概念のひとつであろう。

本研究の分析結果とその示唆は以下の通りである。

まず「ぶちナショナリズム」意識とは、本研究で対象とした質問紙調査によれば、共同体意識、日の丸・君が代意識、排外性意識など多元的に構成される意識である。そして、それぞれの意識を規定する要因を見ていくと、性別では男子に比べて女子で、クラスの中での成績を見ると下位の者ほど高まることが明らかになった。さらに中間集団に対する帰属意識との関連で見えていくと、家族、通学している学校、住んでいる地域社会に対して好意的なものほど（帰属意識の高いものほど）、ぶちナショナリズムを構成する3つの意識も高まる傾向にある。このように見ていくと、ぶちナショナリズムとは、「このころの問題」(心理主義)あるいは香山の言う「精神医学」の問題の背後に、性別などの属性、あるいは家族・学校・地域社会など中間集団に対する帰属意識などの「社会的なるもの」を背景として成立しているといえるだろう。

その社会的なるものを背景とした感覚こそ、「存在論的安心 (ontological Security)」というべきであろう。A・ギデンズ (1990=1993 訳)によれば、存在論的安心とは「ほとんどの人が、自己のアイデンティティの連続性にたいして、また行為を取り囲む社会的物質的環境の安定性

にたいしていただく確信」(116～117頁)を指す。幼少時から親との相互関係・基本的信頼を基礎にして、家族・学校・地域社会をはじめとする中間集団・外的世界に対する存在論的準拠点や友人などの他者との一般的な信頼関係を通じて、国家に対する自己アイデンティティを構築し、そこに存在論的安心を得ているのではないだろうか。

さらに、日本という国に対する帰属意識（日本という国が好き）の分析結果についても振り返っておこう。分析のモデルや投入した変数によって若干の違いこそあれ、やはり性別では女子、中間集団に対する帰属意識が高いもの、そして「ぶちナショナリズム」との関連でいえば、日の丸・君が代意識や排外性意識が高いものほど、国を愛する気持ちが高い。一時の「ノリ」のように見られる大衆心理や集団意識として見られる「ぶちナショナリズム」現象や意識は一部で日本という国への帰属意識（ナショナリズム）にも連続している。つまり、ぶちナショナリズムとは、香山（2002）が論じるように、国への帰属意識などに代表されるナショナリズムとは別物ではないし、明確に区別して論じられる意識ではないのである。

しかし、先にも述べたように、国際試合での応援等で表出される意識や態度として愛国心（ぶちナショナリズム）を問われる場合と、「国を愛する態度・意識」という形で問われる愛国心とは、一部の高校生の意識のなかで、明確に区別されている可能性も高い。これは質問紙調査のワーディングによる技術的な問題であり、愛国心を含めた社会意識を質問紙調査で問うことの限界であるかもしれない。

2006年12月に改正された教育基本法では、特に「国を愛する」の文言を入れることをめぐって注目を集めた。同法の第3条「教育の目的」には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とある。また、『心のノート 中学校』（文部科学省・2002年～）のなかにも、「ふる

さを愛する気持ちをひとまわり広げると それは日本を愛する気持ちにつながっている。私たちが暮らすこの国を愛し その発展を願う気持ちはごく自然なこと」という文言がある。

高校生の意識においても、「ふるさを愛する気持ち」とは本研究で明らかにした「地域社会に対する帰属意識（自分の住んでいる地域が好きである）」とほぼ同義である。そして、そうした地域に対する愛着が国に対する帰属意識や愛情と地続きになっている。また、小針(2009)でも明らかにしたように、家族や友人などと関係が良好なものほど、国を愛する意識が高まることも示された。いわば他者との関係性が愛国心に重要な関係をもっている点では、ぶちナショナリズムも「国を愛する気持ち」も同じである。

しかし、すべての高校生が他者や中間集団と良好な関係にあるとは限らない。もう一方で、個人化(individualization)も進行している。そのなかでも、2000年代を前後して、「ネット右翼」などと呼ばれる、インターネットの掲示板などに排他的・排外的な国家主義的・国粋主義的な内容を書き込む若者たちの姿が頻繁に論じられるようになった(近藤・谷崎・桜井2007)。彼らの特徴は他者や人間関係を取り結ぶことなく、ひと飛びに「日本」に行きついてしまうところにある。そして、これは日本に限らず、東アジア各国でも確認される現象だという(高原2009)。

本研究でも明らかにしたように、今やインターネットや国際試合など、サブカルチャーを含めた多様なレベル・領域で、若者たちは日本のチームを応援している。B・アンダーソン(1991=2007訳)は、「国民とは「イメージとして心の中に」想像されたものである」と定義したうえで、「いかに小さな国民であろうと、これを構成する人々は、その大多数の同胞を知ること、会うことも、あるいは彼らについて聞くこともなく、それでいてなお、ひとりひとりの心の中には、共同の聖餐のイメージが生きている」(訳書24頁)と論じている。仮にお互

いに面識はなくても、文化や歴史を共有している共同体として「国」を想像し、共同体に所属していることを意識することがアンダーソンの「想像の共同体」論である。日本の国民が国際試合における日本のチームに対して「想像上のつながり」を抱くことができるからこそ、そこに「ぶちナショナリズム現象」が観察されるのではないだろうか。

本研究で明らかにした高校生の意識を前提にしたとき、はたして学校教育が「国を愛する気持ち」なるものを教えることがどの程度、児童や生徒にとって、リアルな現象または感覚として受け止められるのだろうか。本研究で明らかにしたように、人間関係や中間集団から疎外されている生徒にとっては、日本を愛する気持ちや学校教育そのものから離反してしまう可能性が高いだろう。学校という公教育の現場において、すべての児童・生徒に対して「穏健なナショナリズム」を育もうとすれば、それこそ一部の子どもにとっては強制された愛国心になりかねないのではないだろうか。あるいは逆に、ぶちナショナリズムを通じて日本を愛する者がいても、彼／彼女らがそれを「国を愛する気持ち」として意識的に教師らに提示することをしなければ、「国を愛している」者として評価されないという問題点も残る。

このように、生徒たちの感覚レベルと教育実践のあり方を丁寧に議論して、それを実践に移さない限り、学校において愛国心を「教える」ことは一部の生徒たちにとっては絵に描いた餅になりかねないのである。

〈付記〉本研究は平成20～23年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(B)「保守化・個人化する現代社会における子どもたちの社会的紐帯」(研究代表者・小針 誠／研究課題番号20730538)による研究成果の一部である。

註

1) 社会の心理主義化とは「さまざまな社会現象を個

- 人の心理から理解する傾向や、自己と他者の『こちら』を大切にしなければいけない価値観、そのために必要な技法や知識が、社会のすみずみに行き渡って」いく過程であり、「現代日本を特徴づける一つの『生活態度』」（森 2000：15）を指す。
- 2）ところが、本調査データにおいては、所属学科に関するデータがすべて消去されているため、その別による分析はできない。
- 3）「ぷちナショナリズム」との関連でいえば、2002年の日韓共催のワールドカップで、顔に日の丸を彩るフェイス・ペインティングや、選手のユニフォームのレプリカを着用して、スタンドで応援する姿が目立つようになった。これは日本のみならず韓国などでも同様の現象として確認することができる。
- 4）なお、小針（2009）では調査対象校との交渉の過程で「学校の勉強の理解度」を以って、それを「学力」とみなして分析した。

参考・引用文献

- Anderson, B., 1991, *Imaginal Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition) Verso. 『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳）書籍工房早山 2007 年。
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity, Polity*. 『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』（松尾精文・小幡正敏共訳）而立書房 1993 年。
- 広田照幸（2005）『《愛国心》のゆくえ 教育基本法改正という問題』世織書房。
- 香山リカ（2002）『ぷちナショナリズム症候群 若者たちのニッポン主義』中公新書ラクレ。
- 小針 誠（2009）「中学生は『日本を愛している』のか？ ～保守化する現代日本における中学生と愛国心～」『同志社女子大学 総合文化研究所紀要』同志社女子大学総合文化研究所 43～54 頁。
- 近藤瑠漫・谷崎晃・桜井春彦（2007）『ネット右翼とサブカル民主主義 マイデモクラシー症候群』三一書房。
- 森真一（2000）『自己コントロールの檻 感情マネジメント社会の現実』講談社。
- 野崎孝弘（2008）「書評 香山リカ『ぷちナショナリズム症候群—若者たちのニッポン主義—』（中央公論新社・2002 年刊）」『貿易風 中部大学国際関係学部論集』第 3 号 304～308 頁。
- 高原基彰（2006）『不安型ナショナリズムの時代 日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』洋泉社新書。

Anderson, B., 1991, *Imaginal Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* (Revised Edition) Verso. 『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』（白